

「学、ふとは誠実さを胸にきざむこと、教えるとは希望を語ること」、これはナチスと闘った詩人アラゴンの「フランスの起床ラッパ」に寄せられた言葉である。有名な「神を信じる者も、信じない者も」とともに私の骨格を形成した。日教組の「教え子を再び戦場に送るな」と同じである。感情が言葉を生み出すと同時に、言葉が人間の感情を生み出す。まさに教育である。自分で作ったもので自分が存在しなくなるかもしれない原爆。まさに人類史はヒロシマ、ナガサキで折り返し点に差し掛かった、と井上ひさしは言う。これを記録するために作った作品「空襲とせば」(1994年)は二つの言葉をきっかけとした。一つは「広島市民に対しては気の毒であるが、やむをえない」という昭和天皇の言葉、もう一つは、ヒロシマの原爆犠牲者人ホームで原爆症と闘う方々に「病は気がかり、病性さえいかりしていれば病性は逃げていく」と語った中曾根康弘首相(当時)のことは、井上はこれを聞いたときキレてどうしても書かねばと思ったという。非人間的なことは対して本心に優しいのは、コロナ問題で生まれたソーシャルディスタンスに対する加藤登紀子の説明。「心の届くほどよい距離。居心地よい優しい空間。離れていても抱き合える。」

閉塞を越えて
「能力」「資質」「態度」という言葉があまりにも使われ過ぎて、人間を縦の序列で比較したり、特定のふるまい方の基準を満たしていない場合に排除する事態が起り、日本の教育は閉塞状況に陥っている。これを克服するためには高校の制度や入試など取り組む課題は多い。
私は自分の高校時代は素晴らしいと思った。先発して、生徒の個性と自発性、友情を重視する「進学超一流校」を紹介する番組を見て、私が在籍した高岡高校が、その本質において同じだと思った。また本田由紀の提起する高校の在り方とも一致すると思った。「教育は何を評価してきたのか」
超学年制度で学年はなく、一つのクラスに1年生も3年生もいた。力が平等なのでクラス対抗の運動会・文化祭などは盛り上がり、仲間の連帯を感じ、楽しかった。先輩を見習って受験勉強なども出来た。3年のときのホーム主任は、私が大学受験が出来るように、3度も家庭訪問して親を説得してくれた。

夢仕事 魂の技師・生徒と創る形の残らない芸術作品
夢仕事と 名づけて君と 積みてきし 教師の歳月 ときにはかなむ (朝日歌壇)
漱石は「三四郎」のなかで、自分の分身である先生にこう語らせている。熊本から上京する三四郎に、汽車の中で「東京は広い。世界はもっと広い。心は更に広い」と。読書などが心を広げる。
「世界より 心は広い 三四郎」
私は、55年の教師生活を振り返り、5・7・5で表現してみた。

卒業や 一本道を 背を伸ばし 自立への 旅立つ朝や 峠道 教え子の 模試採点し 春を待つ パソコンに 向かいて春は 過ぎんとす 四〇年 希望を語り 願って 無能無才 峠の道を ただ歩く 下向けば 虹は見えぬと チャップリン なげいたり 怒ったりして 生きていく 怒り憤れ 決して忘れず 黙らずに 挨拶く 自然の春を 私にも 教室の 最後の授業 仲間(ひと) 溢れ 今日の日は 明日に続く 出発点
過酷な環境の中で多くの人が人間性を喪失させられたが、小さな窓から見える風になぞ、ぐ木の葉を美しいと思っ、た人は、人間の尊厳を保った。



高退協文芸

五行歌

同本肇
私の夢は
ビーブルの泡
最初フクメン
でもすく消える
二杯目があふれ
ちゅうと休んで
五行歌で
詩ごみよう
私の気持ち
私の心

詩

朝
西村雅人
朝が来て うれしい
何となくともなく
ただ それだけで

短歌

朝が来て うれしい
何となくともなく
ただ それだけで
香りのいいコーヒーを飲み
トーストをかじり
生野菜を食べる。
生け垣の青葉がゆれる
風がカーテンをくぐります
そんなことで 満たされている

希望を拓く

叶岡淑子
ウィルスのパンデミックをもたらすは利潤追求に奔る人類
誰ひとり取り残さな社会への想い深まる「コロナ禍体験
子どもらに少人数学級プレゼント希望拓こう「コロナ後の社会
小名木綱夫の名言
物騒な春告鳥かウィルスの声のみ満ちる日本列島
〔春告鳥〕「ウグイスは「ウグイスは「子連れ」
全身が手のひらと化する山雀の野生の趾手のひらに受け
(私のウオーキングコースの山頂にて)

俳句

花蘇鉄の四季
小澤 幸泉
初夏の土佐の山々君遠く
桜散るのびらびらとつ触れながら
山桜何を聞いても答えなく
眠れずにと見上げる夏の月
幽霊の舞台上がらぬ土佐の梅雨

川柳

短歌とは「太鼓の響き」人生を聞く自分励ますものと
〔角川「短歌」六月号の「うたの名言」に小名木綱夫の言葉が紹介されて
いる。戦時中、治安維持法で検挙され半年間拘留されたが転向せず、戦
後共産党に入った意欲の強い人である。〕

青虫

山本晶子
道端に手紙を置き去せてゆく今週二度目いやいや始末す
セメントを運びたる青虫手に取りて露草の葉たそと隠しけり
元検査トランプ反対表明す検査定年延長法案に

帆傘集

小澤 幸泉
快い風が「コロナ」を運び込む
終活と断捨離妻に急かされる
老二人夫だんだん黙りだす
生きてます母の遺影に呼びかける
切る度に白髪だんだん増えだした
にぎやかに彩りそえるチアガール
金婚式いまだに妻はほえてる

